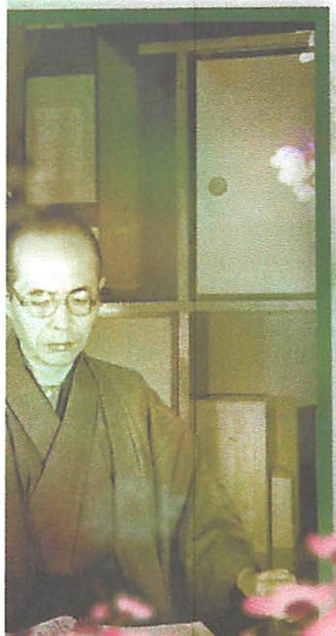
もっと知りたい

池田亀鑑と「源氏物語」

～第２集～



新　典　社

もっと知りたい　池田亀鑑と「源氏物語」～第２集～

伊藤鉄也　編

新典社

9784787960528

1920395030002

ISBN978-4-7879-6052-8
C0395　¥3000E

定価：本体3000円＋税

主要参考文献

・池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（昭和四十年、至文堂）
・池田亀鑑『平安朝の生活と文学』（平成二十四年、筑摩書房）。なお、同書「はしがき」の引用は、昭和三十九年復刊の角川文庫版「解説」による。
・池田亀鑑『花を折る』（昭和三十四年、中央公論社）

伯耆地方の古典文学

第一回　八幡神社の源氏物語

原　豊二

本稿は、当該シリーズ第1集での「池田亀鑑前史―鳥取藩の国学と詠歌の動向―」という拙文を引き継ごうとするものであり、伯耆地方における古典文学をとりまく状況を資料とともに紹介することをその趣旨としている。池田亀鑑の生育環境の淵源としてお読みいただければ幸いである。

まず、この八幡神社の説明からしたいと思う。米子市東八幡に鎮座するこの神社は、社伝によれば養老四年（七二〇）の創建という。この創建時期については幕末の地誌『伯耆志』が否定するが、相応に古い時期からあった神社であることは間違いなく、最近では平安時代の神像が突如出現して地域の話題になった。所蔵の棟札の記述を見ると杉原景盛や吉川広家など戦国武将の名があり、また豊臣秀吉の奉納とされる翁面なども遺されている。この神社の歴史については、近年、本格的な調査が始まったところであり、今後の進展が期待される。なお、天正期以降、本社は京都から来たという内藤家が宮司職を務めている。

さて、ここで紹介したいのは八幡神社に伝わる『源氏物語』三冊である。いずれも写本で、桐壺巻が二冊、また帚木巻が一冊である。以下、簡潔にその書誌を記したい。

一、桐壺巻Ａ

外題「桐つぼ」(直書)、袋綴、二十七丁(表紙を除く)、縦二七・〇センチメートル　横一九・〇センチメートル、一面十一行書き、表紙右下に「目連尊者」とある。表紙は本文と共紙。行間に注記がある。

二、桐壺巻Ｂ

外題「桐つほ」(直書)、袋綴、十八丁(表紙を除く)、縦二八・五センチメートル　横二〇・五センチメートル、一面八行書き、表紙左下に「ぬし　つなが(花押)」とあって、八幡神社の宮司であった内藤綱長の所持であったことがわかる。表紙は本文と共紙。行間に注記がある。桐壺巻の途中までを写している。

三、帚木巻

外題「はゝきき」(直書)、袋綴、二十丁(表紙を除く)、縦二七・〇センチメートル　横一九・一センチメートル、一面六行書き、表紙左下に「ぬし　綱長」とあって、これも内藤綱長の所持であったことがわかる。表紙は本文と共紙。行間に注記がある。帚木巻の途中までを写している。

八幡神社所蔵・源氏物語桐壺巻Ａ

八幡神社所蔵・源氏物語桐壺巻Ｂ

これらの写本であるが、書誌からは内藤綱長の所持ということしか情報を得られるものではない。しかしながら、桐壺巻と帯木巻であることや、行間に注記があり、これらの中には口語的な表現もあって『源氏物語』の講釈の控えというようにひとまず推察できる。書写年代も江戸時代後期と思われる。では、伯耆地方で『源氏物語』の講釈は行われたのであろうか。

国学者の衣川長秋(一七六六～一八二三)は本居宣長の弟子で、鳥取藩に出向き、国学の教授にいそしんでいた。長秋の旅日記は二つ残されていて、一つは『田蓑の日記』といい、もう一つは『やつれ蓑の日記』という。双方の記事からこの写本に関わるであろう箇所を検討し、これらの由来を考察していきたい。

『田蓑の日記』は、文政元年(一八一八)秋における鳥取から出雲大社への紀行文である。これは版本によって流布した。序文に文政四年とあるので、刊行されたのはそれ以降である。まず、往路で長秋はこの八幡神社に立ち寄っている。

八幡神社所蔵・源氏物語帯木巻

> 八月朔日　休明(著者注・鷲見保明のこと)が教え子にて、田口老翁が学びのはらからなる、尾高村の流水といふ人、内藤何がしをいざなひて、おのれが来たりけるを、聞きつけて訪ひ来けり。何くれと物語らふついでに、出雲の大神拝みに、物せんことをそのかしければ、さらば今夜は内藤何がしが、馬場村にとて、四人うち連れ行きて、内藤何がしが家に宿る。日吉津村より馬場村まで、一里ばかりなり。〔本文は版本によったが、私に改めた。〕

ここでの「内藤何がし」は、時期から考えて内藤綱長と考えてよいだろう。よって、長秋は八幡神社の宮司・内藤綱長のもとに旅中宿泊したことがわかる。おそらく、ここで初めて二人は出会ったのではなかろうか。なお、翌二日には八幡神社のある馬場村を出発している。

さて、本願であった出雲大社から戻って来た長秋は、再び伯耆地方に逗留することになった。以下は日吉津での記事である。

十日　空のけしきも直れり。今日より源氏物語説きてよと、請ひければ、帚木巻より説き始む。

十一日　例の物語説く。風吹き、雨をりをり降れり。明日は二百廿日にて、おくての稲の花の真盛の比なれば、いかにあらんと人々いぶかりをりぬ。

十二日　昨日のけしきにひきかへて、ちりも曇らず晴れわたれり。今日しも、延喜式・祝詞巻説きてよと、請ひければ、まづ新年祭の祝詞を説く。今年は、御年ノ神のちはひ給ひて、おくつ御年も八束穂の、いかし穂に立てし給へば、手肱（タナヒヂ）に水沫（ミナワ）かきたり。向股（ムカモモ）に肱かきよせて、とり作りしかひも、千かひ八百かひありと、喜び合へり。例の物語も説く。

十三日　今日も空晴れわたれり。例の物語説く。祝詞巻は、さはる人のありければ説かず。

ここで衣川長秋は『源氏物語』の帚木巻、また『延喜式』『祝詞巻』を講釈している。ここに内藤綱長の名前はないが、綱長の住む馬場村から日吉津村までは一里ほどであるので、こうした講釈に綱長が参加した可能性は高いと考えられる。それは単に近隣ということのみならず、当時の文化的な人脈に神主が関わることは自然であるし、特に八幡神社は、江戸時代を通してこの地域の神社の取りまとめ役のようなことを任せられていたことから、国学者・衣川長秋の訪問に敏感に反応したとしても不思議ではない。もっとも講釈の十日前に長秋は綱長の家に泊まっているわけであるから、十分、知己であったとしてよいだろう。

現在、八幡神社に残されている『源氏物語』のうち、帚木巻一冊はこの講釈に関わる可能性がある。ただ、現存する帚木巻の写本には一丁目と二丁目にしか注記がなく、もし綱長自身による聴講であったとしても、あまり身にならなかったものであったのかも知れない。なお、九月四日にも長秋は「内藤何がし」の家に寄っている。この時は「かれいひ喰ひて、申ノ時ばかりに、日吉津に帰りぬ。」と、すぐに立ち去っている。

翌文政二年の旅日記『やつれ蓑の日記』（同四年序、同六年刊）では、内藤綱長の記述は見当たらないものの、長秋が米子の田代元春のもとで『源氏物語』の桐壺巻を講釈していることがわかる。閏四月一日から八日にかけてのことである。一般に『源氏物語』の講釈でよく使われるのは桐壺巻と帚木巻であったと言われるが、ここでもそのようなことが当てはまると言えよう。もちろん、田代元春宅で行われた『源氏物語』の講釈に内藤綱長が同席したかは全く不明であるが、そのような情報が伝わっていた可能性は高いだろう。そうでなくとも、同一の社会関係・人間関係に彼らがいたことがおおよそ事実なので、そうしたつながりのあったことは少なくとも認めるべきであろう。

少しまとめると、八幡神社に伝わる『源氏物語』の三つの写本は衣川長秋の講釈に関わるものと推察される。本写本には、程度こそ違うものの注記が記されており、それはこの講釈時の記録であるとひとまず考えられる。この注記は衣川長秋が独自に話したことを記しているのであるから、そういう意味では新出の資料である。現存する衣川長秋の著作には、直接『源氏物語』を論じたものはない。そのため、国学者・長秋の『源氏物語』に対する考え方が理解できる資料として考察の余地は十分にあると言えよう。そして、師であった本居宣長の『源氏物語』観とどのように

一致し、どうのように相違しているのかを判別できれば、なおのこと興味深いことになる。鈴屋門下の『源氏物語』受容の実態のわかる内容が含まれていることを期待したい。

さて、本文注記そのものはどのようであろうか。ここでは、桐壺巻Aの写本の冒頭一丁目から見ておきたい。

まず、一丁目表の右上であるが、『源氏物語』全般について、次のように記している。

源氏物語　人皇六十六代一條院御時、上東門院え仕奉し紫式部の筆作にして、作り物語なり。なれとも、善は善、悪は悪と書しなれば、人も身につまされて、自然身をつゝしむこゝろのおこるなれ。勧善てうあくの設けなり。〔句読点を附した。〕

興味深いのは、紫式部の執筆意図として「勧善懲悪」が挙げられていることである。これは、本居宣長が「儒者読み」として徹底して批判した内容ではないだろうか。この「勧善懲悪」論は江戸時代にかなり広く流布した説で、文政の頃であれば、もはや陳腐な説になっていたものと考えられる。また、どちらかと言うと俗な『源氏物語』の受容の一側面であって、いかにも教訓的な解釈として捉えられるべきものでもあった。これを仮に衣川長秋が話したなどと考えると、宣長の源氏論はあまり弟子に伝わっていなかったということになるが、いかがだろうか。

次に、同じく一丁目表の本文部分の行間注記を見てみよう。

上ろうの分際にはあらぬか〔本文・いとやむごとなききはにはあらぬが〕

桐壺更衣、とりわけ御寵愛ありけり〔本文・すぐれてときめき給ふありけり〕

外の女御更衣方はしめ、入内にわれこそ器量も人より勝れしなれは、外に人はなしとこゝろに思ひあかり給ふ。〔本文・はじめよりわれはと思ひあがり給へる御かた〴〵〕

このように、解釈というよりも俗語訳に近いというべきであろうか。主に内容の理解を手助けしているような印象を受ける。こうした注釈自体、興味の惹かれるところであるが、これが講釈者の言なのか、聴講者の解釈なのか、その両方なのか、やや慎重に見極めたいものである。もちろん八幡神社の写本の行間注記は、すべてを読んだ上で総合的に判断すべきものであるが、今はその労に堪えられず、ここまでを述べることにした。

さて、本資料は近世後期における『源氏物語』受容の地方でのあり様を窺い知るものであり、特に「講釈」がどのようなものであったのかを理解するのに有益である。このような受容は相対的に考えれば、時期として遅かったとも言えるであろうが、地域にはそれぞれの事情というものがある。現在よりも情報量の少なかった時代、こうした地方において『源氏物語』を果敢に摂取しようとした意気込みをまずは感じるべきであろう。伯耆地方にも『源氏物語』はあったのである。

追記

所蔵の資料の使用をご許可いただいた八幡神社宮司の内藤和比古氏には、この場を借りて御礼申し上げたい。また、当該写本の調査については須藤圭氏との共同研究であり、須藤氏にも感謝申し上げる次第である。より詳細な報告については、後日、共同研究の成果として発表していくことを計画している。